それでも好きというのなら

アルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
それでも好きというのなら

【Ｎコード】
Ｎ８８９９Ｗ

【作者名】
アルト

【あらすじ】
小長谷　有紀は高校の先生をしている女教師。
男勝りと冷徹な性格を兼ね備える有紀は恋愛経験ゼロ。
そんな有紀のもとに突如やってきたのは、人間として生き返ったという以前、有紀が飼っていたペットの犬の朔夜。
ファンタジーな話など信じられないさめた教師・有紀と元・愛犬が送るラブストーリー……恋に無頓着な彼女（ゆうき）は彼（さくや）の恋心に気づくのか？

1　【本編】突然の来客

誰か……今私が見ている光景が嘘だというのなら説明してくれ。
深い眠りについていて夢の中にいるとしたら遠慮なくたたき起してくれ。
お願いだ――

「今日からよろしく、小長谷（こながや）先生」

誰か、目の前にいる制服姿のこいつを私の前から消してくれ。

「なぜ転校生のおまえが私の家にいる？　一度も住所などを言った覚えはないが……？」

私は今日転校してきたばかりの彼を見やる。
此処は私の家だ。そして、私のリビングだ。
玄関開けるとそこには転校したてほやほやの生徒がいました……なんて、まっぴらごめんだ。
私が教師として勤めている学校の生徒とはいえ立派な不法侵入だ。

「そんな怖い顔で見つめられてもなぁ……昔、俺に向けてくれたみたいに微笑みかけてほしいんだけど？」

むかし……？

彼の顔をじっと観察する。
美しい黒髪と黒い瞳をもつ少年。すっと通った鼻筋。薄い唇。スラリと伸びた手足に、細身の体。一見すれば、美少年だ。
ところが、昔にあったみたいなことを言われてもこんな整った顔立ちをした知り合いなどいないし、今まで教えてきた生徒にも心当たりがない。

「そういえば、自己紹介がまだだっけな。俺の名前は朔夜（さくや）。名字は……えーと、なんだっけ？」

「そんなことは知っている。おまえの名前は椿（つばき）　朔夜（さくや）だ」

自分のクラスに転校してきた生徒の名前を覚えてないのとでも……？
からかってるのか、悪質な悪戯（いたずら）か……まぁ、どちらでもいい。
こちらには教師という絶対的権力がある。
その気にさせれば、相手の成績をオール一にすることだって可能だ。
そんなことに教師という権利を乱用したくはないが……

「覚えてないの……？　俺だよ、有紀（ゆうき）さん。おととい亡くなった、ペットの犬の朔夜だよ……」

目を潤ませながら聞いてくる朔夜。

おい、待て。

心臓に悪いからそんな顔でこっちを見てくるな。

「……さくや？」

心の中で冷やかなツッコミを入れていると、私は彼の言うことに耳を疑った。

「本当に、朔夜なのか……？」

「……」

私の元ペット、朔夜と名乗る謎の転校生は無言でうなずく。

「俺は前の飼い主からは冷たくあしらわれ、買われたその日に捨てられた。だけど、先生は違った。俺のことを見つけてくれた上に、愛情を注いでくれた。俺はその愛情を素直に受け取って育った。でも……俺の寿命は先生よりも短かった」

犬だったから普通の人間の寿命にかなわないことは当たり前だ。

「俺は死んでから思った。俺は先生に何かしてやれたか？　……ってね。そして、願った。願わくばもう一度先生と一緒に生きたい。そして――幸せにしたい……そう思ったんだ」

「……そんなファンタジックなことを言われても理解に苦しむ」

「犬の姿じゃない俺を受け入れてくれないわけだ。要するにあんたには用無し……そういって行くあてもない俺を冷たく追い出すのか？」

彼の言っていることも一理ある。

仮に、彼が本当に私が飼っていたペットの朔夜ならば……だが。

「とにかく此処は私の家だ。部外者に勝手に入られる筋合いはない。そして、私とおまえは生徒だ……この部屋から今すぐでていけ」

低音を聞かせていうが、相手は相変わらず強気な様子で私のほうに鋭い眼差しを向けてくる。

「元、俺の部屋でもあるけど？　俺は昔、先生に飼われてたからね」

「昔は昔、今は今だ。そして私はそんな夢のような話が現実で起こりうるとは考えられない」

「先生の手料理が食べたい」

口を開けばあーだこーだ言う朔夜に対して苛立ちが増す。
そんな悩みを抱える種から解放されたくて、わたしはつい失言をしてしまった。

「……わかった、百歩譲ってお前の話を信じるとしよう。飯(めし)をくったらさっさと出ていけ」

「それは無理。先生と同居する運命みたいにあるらしいし……」

そういって、椿　朔夜がズボンのポケットから取りだした鍵に驚く。
なぜ、私の家のスペアキーを持っている！！

「神様からの贈り物かな？　俺達ってやっぱり――」

「メシを食ったらさっさとか・え・れ」

とっさに彼の口を片手でふさぎ、もともと低かった声をさらに低くして朔夜に囁(ささや)く私。
随分(ずいぶん)と冷徹な性格だ……

少し酷いことを言ってしまったかな……？

少々後悔の念を抱いて彼を見ると、なぜか顔を赤くして立ち尽くしている朔夜がいた。

……あいつが顔を赤くするようなことをなにかしたか？

2　料理と疑問と確信と（前書き）

いきなり美少年という単語が有紀からでてきますが、それは朔夜のことです。

2　料理と疑問と確信と

「なに、ボーッと突っ立っている？　メシをつくるからおまえはさっさと、椅子にでも掛けて待っていろ」

顔を赤面させて硬直している立っている美少年に目をやり、彼の肩にポンと片手を置くと、目で『早く座れ』と指示をする。
私が目で示した場所には一つのテーブルと四つのイスが並んでいる。

「そうですよね……」

私の言葉にどこかシュンとした態度のこいつの反応は一体全体なんだというんだ？
そもそも、こいつが先ほど顔を赤くしていた理由もわからない。
私はただ、脅しただけだ。教師らしからぬ行動だが……

『メシを食ったらさっさとか・え・れ』

ついさっき言った言葉を心の中で復唱するがやはりわからない。
普段の私の声よりも低い声、つまりは低音でドスのきいた声をきいてひるまない奴は初めて見たと、内心驚く私もどうかしてるが。

「できたぞ」

キッチンに立つこと数十分。
私は一人暮らしで身に付けた家事の腕をふるい、今まででこんなにメシを早く作ったのはないのではないか……？という程の早さでメシを作り終えた。

ちなみに今日の夕飯はチャーハンと、野菜スープとサラダと、野菜と肉を炒(いた)めた料理である。
簡単なメニューのせいか、お節介者が一匹――いや、一人いるせいか、普段より格段にはかどった家事であった。
それ以外にも、今朝の残りの冷たいご飯を使ったせいか、思っていたよりも早く料理ができたのは確かだった。

とっとと、こいつを家に帰したい――家にいてまで生徒と向き合うのはごめんだ。
非常に疲れる。一緒にいれば間違いなくストレスの原因になりそうな彼はというと、私が運んだ皿にのった様々な料理に夢中なようだった。

全ての料理と二人分の箸と麦茶を入れたコップを運んでから一言、私は彼の向いにある席に着き手を合わせてこういうのだった。

「いただきます」

「いただきます」

それにならい、朔夜も背筋を伸ばし手を合わせて元気よく言った。
ちなみに、料理を盛り付ける皿もちゃんと二人分用意した。
生徒と同じ皿にのっている料理をつつくなんて新婚さんみたいな行為をするのはごめんだからだ。

「おいしい」

彼はこいつのお節介者ぶりを知らない奴がみたら思わず見とれてしまうであろう極上の笑みを浮かべて、私の料理を頬張っていた。
満面の笑みも反則だ。お節介者……そうだと彼の本性を知っている私でさえも、思わず箸の動きを止めて見入ってしまう。

「別に私はおまえを家に泊めるとは言ったわけじゃないからな！！」

そんな自分の行為に動揺しながらも声を荒げ、席を立つ私。
その際、バンッ！と両手を机の上に勢いよくついて立っていた。

「へ……？」

よっぽど驚いたのか、綺麗な漆黒の瞳を大きく見開き、私のほうを見て固まる朔夜。
そりゃそうだ。

いきなり教師、しかも女……が行儀悪く食事中に声を荒げて席を立ったら誰でも驚くに決まっている。

「すまない……」

私は自分の行動の軽率さを後悔しつつ、謝罪する。

「食事を続けてくれ」

そして、続けて言葉をいう。

「気にしなくていいですよ、先生が怒った原因はどうやら俺にあるみたいだ」

彼は二コリと笑いながら言うが、目が笑ってない。笑ってないぞ、全然。
これは怒っている時の目だ……私は直感的にそう感じた。
朔夜に出会ったとき、その犬もそんな目をしていたからである。

この時、疑問は確信に変わった。

こいつは、私が以前飼っていた犬の朔夜だ。

もっとも、今の彼は人間であり私の生徒であり、私の犬でもなんでもないのだが。

3　冷徹姫（前書き）

ちょっと有紀が暴走気味になっています。
それでもいいという方はご覧ください。

3　冷徹姫

認めたくないが、目の前にいる謎の転校生はどうやら本当に朔夜らしい。
私が以前飼っていたペットの犬の朔夜らしい……

「怒ったのは、だな……」

私が彼から目をそらして話そうとすると、

「なんでそっぽ向いてるの、先生？」

当の本人は無邪気に聞いてきた。

つっこむな！そこはつっこむな！！
それは、おまえの顔を面と向ってみる勇気がないからだ！！！
天然か？こいつ、天然か！？
自分の容姿を鏡で見たことがないのか！？
一人、自分の心と葛藤する私。

「それは……おまえの顔に……」

相変わらず視線を泳がせたまま言う私。

「俺の顔に……？」

「マヨネーズが付いているからだ！！」

……苦し紛れの言い訳だ。
マヨネーズよ、どうか朔夜の顔についていてくれ。
心の中で願うが、そんな願いがかなうはずもなく――

「あっ、本当だ！」

――は？今、何といった？？
私が顔を朔夜のほうに向けると、そこには唇の端についているマヨネーズを手で拭う彼の姿が……
どうやらサラダにつけたマヨネーズがついてしまったらしい。
神様、ありがとうございます。
この時ばかりは、神という架空の存在に感謝した。

「先生、気づいたんなら早くいってよね？　俺、恥ずかしくて死にそう」

「死ぬなんて簡単に言うな！」

私は朔夜の軽率な発言にカッとなって、怒鳴る。

「……ごめんなさい」

シュンとする子犬のような朔夜。
今のこいつに犬耳が生えていたら、きっとその犬耳も彼の感情を表現するかのごとく、垂れ下がっていただろう。
なにを考えてるんだ……私は。
最近現実逃避しすぎた、ファンタジー小説の読みすぎだ……と、少し後悔し、同時に反省する。

「……話は変わるが、おまえは本当に朔夜らしい。先ほど怒ったときの顔といい……」

こうなりゃやけだ、話題転換するしかない……そう思い、目の前に座る彼に目をやる。

「顔といい……？」

「目が笑ってなかったところとか、そっくりだった。出会ったころの朔夜に。」

そりゃぁもうくりそつでしたよ。
顔は笑みを浮かべているのに、目は全然笑ってないところが！
本当にそっくりでしたとも！

私は心の中で、朔夜に悪態をつく。
仮にも生徒に対していくら心の中とはいえ、こんな態度の教師でいいのかどうか……一途の不安を覚えながら。

「先生、それ褒めてないよね？　絶対けなしてるよね？」

「褒めている……と、受け取れたら、どれだけポジティブシンキングか耳を疑うところだ」

「先生の意地悪……でも、そんなところが――」

「大嫌いなんだろう？」

言われなくても分かっているし、十分自覚しているつもりだ。
私は男勝りな性格の上、冷徹だの冷めてるだの言われ、挙句に生徒に泣きだされてしまうほどの経験もある氷の心の教師だ。
冷徹姫……
ついたあだ名がまさしくそれ。
私というキャラクターを指し示すのにふさわしい名前だ、不愉快なくらいに。
姫なんていう柄じゃないけどな。

言い終えた後で、先ほど座っていた席に着き、皿に盛りつけられている料理に箸を進める。

「はぁ……」

小さくひとつため息をつき、私は昔の記憶をフラッシュバックさせた――

3　冷徹姫（後書き）

有紀にツッコミ役という新たな役回りができました。

4　朔夜との出会い

「どうしたの……君も、独り？」

散歩をしているとふとなにかが目にとまり、駆け寄ってみた。
すると、そこにいたのは一匹の子犬。
私はその段ボールに入っている捨てられたと思われる、子犬に話しかけた。
なんだか哀れで可哀そうで……そんなところが今の自分に重なって。

「ワン！」

土砂降りの中、犬は大きく一度吠えた。
たくましいな……私は正直、そう思った。
ところが、その犬の顔は笑っているのに、目は笑っていなかった。
それがどうしてかは、その時の私にはわからなかったのだけれども。
すると、突然子犬はその場に倒れた。
私は慌てて、子犬を抱き抱える。
その際、持っていた傘は邪魔だったので近くに投げ捨てた。

そして、自宅へ連れ帰った。
ペット用のクッションがあったので、それに子犬を寝かせて看病をした。

「大丈夫……？　心配したんだよ……いきなり吠えたと思ったら、倒れちゃったから」

寝る間も惜しんで看病した甲斐もあり、ワンちゃんは息を吹き返した。
よかった……

「今日からあなたに私の家族の一員になってもらおうと思っているんだけど……名前は朔夜でいい？」

「ワン！」

元気良く吠える朔夜に微笑む私。
今までの災難が嘘のようだ。
実は、私は朔夜を拾う前日、両親を亡くしていた。
交通事故だった。
車で旅行から帰ってくるときのことだったそうだ。
対向車が不注意だったせいで、私の両親の車に衝突し、私の両親は亡くなった。
そのせいで、今のこの瞬間まで笑ったことなどなかった。

ありがとう、朔夜。

感謝の気持ちでいっぱいだった。
そして、私と朔夜が出会ったのは偶然か、それとも必然か？
……それはよくわからないけれど、とにかく嬉しかった。

しかし、人間の寿命に犬がかなわないという現実はやってきた。
朔夜が亡くなるのだった。
私が朝起きて、いつも通り朔夜の顔を見に行くと、そこにいた朔夜はすやすやと眠っているように見えた。
私は安心して、朔夜の頭をなでた。
しかし、なんの反応もなかった……
この時すでに、朔夜は亡くなっているのだった。
安らかに眠るようにして、朔夜は気持ちよさそうな笑みを浮かべて、天国へと旅立ったのだった。

誰もがそう思っただろう。

しかし、今現在、自身を朔夜だと名乗る目の前の美少年に視線を向けると、なにを勘違いしたのかそこには目をキラキラと輝かせながらこちらのほうを見て微笑む……人間になった朔夜の姿があった。

これは鶴の恩返しならぬ……犬の恩返しか？

そして、これからの私の教師生活はどうなってしまうのだろうか……？

心の中に大きな疑問と不安を覚えながら。

4　朔夜との出会い（後書き）

今回のお話は、朔夜と有紀の出会いについてでした。
また今度朔夜視点の有紀との出会いなどについても書きたいと思います。

感想の書き込みやお気に入り登録などはご自由にどうぞ。
まだまだ未熟者ですが、精いっぱい小説を書いていきたいと思います。

5　先生二人

「小長谷先生……どうかなさったんですか？」

優しく問いかけてくるのは、志水（しみず）先生。

「いえ……昨日寝不足でしたので、たぶん、そのせいかと」

現在私がいるのは、職員室。
私は志水先生の質問に対して当たり障りのない答えを顔に作り笑顔を浮かべながら言う。
その顔には今もきっと、目の下にクマがあるはずだ……あいつのせいで寝不足で。

それに、普通言えるか？
昨日、自分のクラスにやってきた転校生が家に帰ったらスペアキーで不法侵入していて、そして私の手料理を食べたいと駄々をこねたあげく、私は折れ、仕方なく手料理つくって、帰るあてもないというから、仕方なく……本当に仕方なく、シャワーを貸して、ジャージも貸して、二階の部屋も貸して、その部屋のベッドも貸してあげたと、言えるか！？
もちろん、同じベッドで寝たりしていないから何の問題もないはずだ。
そうだ――むしろ問題なのは、あいつが元、私の愛犬であるということだ！！！

「……小長谷先生？」

その声で我に返り、声の主を見る。
そこには、きょとんとした志水先生の顔が。
志水先生は、私の先輩教師だ。
本名は、志水（しみず）　圭太（けいた）という。
中性的な容姿で女性に間違われることも多々ある（実際に男性からナンパされたこともあるらしい）が……
その容貌はまさに天使！
栗色の髪に茶色の瞳、長いまつげ、透き通るような白い肌……整った顔立ち、柔和（にゅうわ）な笑顔、物腰の柔らかいところ、そしてなにより優しい性格。
どれをとっても完璧な天使だ！！
結婚するなら男はこうであってほしい！みたいな性格ド真ん中だ！！

「あ……あの、小長谷先生？」

「すみません、ちょっと寝不足で頭がまわらないみたいで……」

不安げな志水先生の声に顔を上げれば、そこには心配そうな瞳でこちらを見ている志水先生の顔があった……

「大丈夫ですか？　早退したほうがいいのでは……？」

「いえ、大丈夫です。」

私は志水先生の問いかけに笑顔で即答する。
早く帰ってなんかみろ……あいつ（朔夜）が何をしでかすかわかったもんじゃない。

「ところで、昨日うちのクラスに転校してきた椿　朔夜君なんですが、以前通っていた学校ではどのような生徒だったんでしょうか……？」

私は話題を切り替える。
これは、昨日から気になっていたことだ。
人間になってまだ間もなそうなあいつが以前の学校でどうしていたのか……そんなこと答えられるのだろうか？
答えられたとしても、どんな生徒だったのか……はたまたどんな設定なのか……気になる。

「椿君ですか……？　彼は、優等生だったらしいですよ。運動神経も成績も抜群に良かったみたいで、校長が鼻高々にそうおっしゃっていましたから」

「……」

マジですか。
信じられないの一言に尽きますよ。
優秀な頭をもってる子ほど、頭にはお花畑でももってて、チョウチ

ョがその周りを飛び交っているのでしょうか……？
いきなりお世話になった人の家に不法侵入して、命の恩人ともいえる人を困らせるようなものなのでしょうか……？
ファンタジーの塊みたいな話をもちだすのは、なぜでしょうか……
……？
そう聞きたい気持ちは山々ですが、此処は学校です。
そして、私は教師です。
……場所と立場をわきまえねば。
私は自分に言い聞かせました。
でも、今度こそめまいがしてきそうです。
ヤバいです。
あぁ、なんか体がふらつくような……そこで、私の意識は途切れました。

「先生……？　大丈夫ですか……？」

「……此処は？」

優しい声の問いかけに、私が聞き返す。
辺りを見回すと、そこは私の知らないお部屋でした。
家具は必要最低限しか置いていないみたいで、どうやら自分の家じゃないのは確かな様子。
シンプル　イズ　ベスト！なお部屋です。
そして、目の前にいるのは志水先生。
もしかして――

「志水先生が私をここまで運んでくれたんですか？」

「はい、そうです。先生の家の住所を知らなかったので、自分の家に連れてきたんですが……」

一言目の言葉は理解できた。
じゃぁ、二言目の言葉はというと――？
……理解できなかった。
どこをどうしたら、私が男の部屋のベッドで寝かされることになる？
たとえ、志水先生のベッドといえど、嬉しくないぞ。
全然嬉しくないぞ！
私の好みど真ん中の性格のかたでも、さすがにそこはわきまえるべきでしょう？
しかも、密室に二人っきりって！！

「ご迷惑をおかけしてすみません。ですが、私はもう大丈夫そうなのでこの辺で――」

そう言いかけ、私が軽く志水先生に向って頭を下げて、部屋から退室しようとした時だった。
手首を引っ張られ、体の動きが停止する。
手を振り払おうとするが、見た目は中性的とはいえさすがは男性。
とてもじゃないが、力ではかないそうにない。

「――待ってください」

振り返ると、そこには真剣な顔をした志水先生のお顔がありました。
しかも、なんか距離が近いと感じるのは気のせいでしょうか……？
目の前に志水先生の顔のドアップは心臓に悪いです。
そんな綺麗な顔を私なんかに向けるなーー！！
きっと、そんなことを知られた日は、学校中の女子を的に回すこと間違いなしだ……
一人、自分の心と葛藤する私。

「……」

そして、やっと冷静になると、今度は志水先生のツッコミどころ満載な行為についてツッコミをいれる……心の中で。
いやいや、待ってくださいと言われてましても。
……というか、顔が近いです、先生！
先生といえば、私も先生でしたっけ。
……って、そんなのんきなことを言ってる場合じゃないんですよ、志水せ・ん・せ・い！
どこをどうすれば貴方の家に密室で二人っきりな状況に！？
そして、自宅に帰りたい気が満々な私はどうすればいいのでしょう——？
答えが返ってくるはずもない問いを心の中で自分自身に問いかけるが、もちろん返ってくる答えもない。

「あなたはいつも、生徒の心配ばかりしている。少しは自分のことも気に掛けたらどうでしょうか……？」

相変わらず、真剣なまなざしをこちらに向けて言ってくる志水先生はやっぱり男の人なんだなぁ……と、思った。
……いくら中性的で優しい天使みたいな容姿をしていても。
私の手首を握っている力の強さや手の大きさも男の人のものだと感じる。

5　先生二人（後書き）

新キャラ登場です！
出したかったキャラなので、登場させることができてうれしいです！！
そして、今回も有紀のツッコミがさく裂！……最初の有紀のイメージを壊してしまったらすみません。

6　条件

「志水先生が心配してくれるのは正直、嬉しいです。ですが……私は、自分のことも十分気にかけているつもりです。ですから……」

そこで私の言葉は途切れる。
それは、志水先生に髪をすかれたからだ。
相変わらず、右手の手首を志水先生の左手に掴まれているので抵抗もできなかった。
志水先生は右手で私の髪をときながら続ける。

「ここまでアプローチしても気づかない人もいるんですね。驚きました……でも、手に入れにくいもののほうが余計に手にいれたくなる……」

「……」

私はその行動に顔を真っ赤にしながら無言で耐えていた。
そして、思考が停止しそうだった。

「つまり……僕が言いたいのは……小長谷先生、あなたのことが好きだということです」

髪をすくのをやめて、私のほうへ綺麗な茶色の瞳を向けて言う志水

先生。
その瞳は真剣そのものだった。
だけど……
今、なんと言いましたか……？
私にはどうやら愛の告白をしているように聞こえたのですが……
……
それはないですよね。
だって、私は地味で真面目で冷徹姫と呼ばれるような冷たい人間ですよ……？
だから、絶対ない。
……というか、ありえない。

「私も好きですよ、先生のこと。同じ先生として尊敬しています。恋愛感情とかはありませんが」

私は作り笑いを浮かべて言う。
内心、かなり動揺しているが……

「僕が言ったのは、あなたに恋愛感情を抱いていて好きだということです、有紀先生」

志水先生に掴まれていた手首が引っ張られ、抱きしめられる形になった。
顔を上げれば、そこには志水先生の整った顔が……
普段浮かべている笑みは消え、真剣なまなざしでこちらを見ている。
そんな状況で、こんなことを言われてドキドキしない人がいるとで

も！？
私の心臓はドキドキしすぎて、破裂寸前だ。
寿命が縮まったらどうしよう……

「顔が真っ赤ですよ、有紀先生」

私を腕の中から解放すると、くすくすと無邪気に笑いながら言う志水先生。

「からかうのはやめてください。先生のせいで、寿命が縮まりそうですから」

私はそんな志水先生にムッとしながら、答える。

「大丈夫です。そしたら僕がお嫁にもらってあげますから」

お嫁にもらってあげるって……それはつまり……

「先生は女の人と結婚したいんですか？　でも、私と先生じゃ不釣り合いですよ？　それに、先生なら女の人がよりどりみどりなはずじゃ……」

そこで、またしても私の言葉は途切れた。

「あなたじゃないと意味がないんです」

声のしたほうへ顔を向けると、そこには真剣なまなざしで私を見つめて言う志水先生の顔が。

「じょっ……冗談はやめてください！エイプリルフールじゃないんですから！！」

私は戸惑いながらも、声を張り上げて言った。
きっと、今頃自分の顔は林檎みたいに真っ赤になっているのだろう……と、思いながら。

「冗談ですか……まぁ、いいです。ところで、ご自宅まで送って行きましょうか？　もう外も真っ暗ですし」

結構です！
そう言おうとした時だった。

「先生！家で待ってたけど、なかなか帰ってこなくて心配になっちゃって……」

突然、志水先生の部屋の扉が開いたと思ったら……そこから出てきたのは……

「なぜおまえが此処にいる！？　椿　朔夜！！」

椿　朔夜だった。
まぎれもないあいつだった。
私はそんな彼に対して、驚きの声を上げる。

「……家とは？　一体どういうことですか、小長谷先生？」

きょとんとしていた志水先生は不敵な笑みを浮かべ、私に問い詰めている。
その笑顔はまるで何かを確信したかのような笑み……弱みを握ったかのような笑みだった。
そういえば、あいつ……家で待ってたけど、なかなか帰ってこなくて……とかなんとかいってたような？
つまりそれは私とあいつが同居している……つまりは、先生と生徒が一緒に暮らしているということをバラしてしまったということか……？
私が朔夜のほうに視線を向けると、あいつはしまった！といわんばかりに口を右手でふさいでいた。
どうせ登場するなら、もっとマシな言い回しはなかったのか！！
私は心の中でツッコミを入れた。
もっとも、今はそんな悠長（ゆうちょう）なことをしている時間などないのだが……

「大丈夫ですよ。誰にも話したりしませんから、その代わり……」

志水先生は天使のほほえみから悪魔のほほえみいや、魔王様の微笑みに変えてこうおっしゃった。

「僕のことをこれからは、圭太先生と呼んでください。もちろん、学校でも」

さらに続けてこうおっしゃった。
ちょっと待ってください！
それってつまりは、親しい仲だと周りでアピールしろということですか！？

「それはむ……」

「無理とは言わせませんよ。先生が僕のことを恋愛対象として見てくれないのなら、強引になっていただくまでです」

そっ、そんな――――――！！！

6　条件（後書き）

朔夜がこちらの世界へ来れた訳などはまたまとめて書きます。
閲覧、ありがとうございます。

7　偽りの仲

「おはようございます、有紀先生」

「おはようございます、圭太先生」

朝、職員室に来ると教員たちは自分たちの眼が節穴ではないかと疑ったという。
なんと、名字に先生とつけてお互いの名前を呼ぶ小長谷先生と志水先生が名前に先生とつけて呼ぶ……親しげな挨拶を交わしている光景があったのだ。
そして、二人は見せつけるかのように挨拶を交わすと、二人並んで職員室を出て行ったという。

「どうしたんですかね……小長谷先生と志水先生」

「今日は雨でも降らなければいいんですけど……」

「天気予報は快晴だったけど、あてにならないわね」

「そうですね……小長谷先生は恋愛とかしなさそうにみえたんですけど、意外ですね」

あっという間に職員室の話題の二人となってしまった二人だった。
特に小長谷　有紀先生に関しては、真面目で冷静というイメージが強かったため、いつの間に!?……と、教員たちは驚いたという。

そんなことも知らず、小長谷はというと……

「どうして、そんなに有紀先生って強調するんですか！？」

こうなった原因の張本人である志水　圭太先生に怒りをぶつけていた。

「いいじゃないですか。そのほうが、効果的でしょう……？」

不敵に微笑んでいるその姿は悪魔の微笑みとしか見えなかった。
その笑みに、有紀は苦笑した。
エンジェルスマイルはどこにいったんですか……と、内心思いながら。
そして……

「ほら、生徒が見ていますよ？」

有紀が近くにいた生徒のほうを見ると、志水先生は先ほどまでのダークな微笑みをきれいさっぱり顔から消して、天使のほほえみを見せる。

「おはよう」

わざとらしく、生徒に優しげな声をかける志水先生。

「おっ、おはようございます！」

顔を真っ赤にして、挨拶をするとパタパタと走り、去っていく女子生徒。
その作り物の笑顔はもはや罪だろ……と、呆れながら思う有紀。

「それで……どこまで二人で歩いて行く気なんですか？」

私は、こんなところで道草食っている場合じゃないんだ……という視線を志水先生に投げかける。
すると、返ってきたのは意外な返答。

「もちろん、小長谷先生のクラスに行くまでです」

……はい？
今、なんとおっしゃいました？？
有紀は頭の上にクエスチョンマークをたくさん浮かべながら口を大きくあけながら志水先生を見た。

「なにもそんなに驚かなくても」

それを見てクスクス笑う志水先生。
いやいや、そこ笑うところじゃないですから！……と、心の中でツッコミを入れる有紀。

「いったでしょう？　僕のことを恋愛対象としてみてくれないのなら、強引になっていただくまで……と」

そうだった。
この人には弱みを握られているんだった。
私が好きで、男子生徒と一緒に同居などしているわけではないが、あいつがスペアキーでのこのことヒトの家にあがってくるから……！！
そのあと、有紀は昨日のことを鮮明に思い出す。
志水先生に車で朔夜と私の二人を自宅まで送ってもらった後、こう言われたんだ……と。

『それではまた明日、有紀先生』

二コリと優しげに微笑みながら言われたのだが、もはや有紀には悪魔とか魔王様とかのダークな微笑みにしか見えなかったという。
そんなことを思い出しながら、先ほど言われた言葉に対して、志水先生に有紀は顔を赤くしながらこういった。

「此処は学校です！そして、今は生徒の登校時間です！！見せつけるのは結構ですが、時と場所を選んでください！！！」

「有紀先生らしいですね」

「そうじゃなくて……」

「相変わらず、真面目で謙虚で……」

「別にそう言ってほしいわけでは……」

「そんなところに僕は惹かれました」

「……はい！？」

まったく成り立たない二人の会話。

そんな中、志水先生の発言に驚きの言葉をあげる有紀。

7　偽りの仲（後書き）

今回は短めです。

8　【登場人物設定】（前書き）

以前、書きとめておいた登場人物設定をのせたいと思います。

8　【登場人物設定】

小長谷（こながや）　有紀（ゆうき）

高校教師。朔夜のクラスの担任を務めている。
男勝りで冷徹な性格をしているが、根は優しいいい先生。
生徒には怖がられながらも、人気があるらしい。
黒髪に黒目をしている。視力が悪いため、黒ぶち眼鏡を掛けている。

椿（つばき）　朔夜（さくや）

有紀のクラスにやってきた転校生。
元・有紀が拾って育てた犬だったりする。
ひょんなことから、人間として有紀のもとへやってきた。
漆黒の瞳と髪をもち、すっと通った綺麗な鼻と薄い唇をもつ……要するに美少年。
有紀のことを尊敬し、幸せにしたいと思っている、恋する男の子。

志水（しみず）　圭太（けいた）

有紀の先輩教師。中性的な容姿をしている。
初めて見た人は男か女か見分けられないらしい……ちなみに、有紀もその一人だった。
栗色の髪と、茶色の瞳をしている。本人は地毛だと言っている。
有紀に恋してる先生。見た目天使なのに、中身悪魔な残念な先生。

生徒からの人気が高い。特に女子生徒からの人気がすごいらしい。
表の顔は好青年。でも、裏の顔はちょっぴりダークな先生。
腹黒教師、二重人格……と、有紀は思っている。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8899w/

それでも好きというのなら

2011年11月24日18時46分発行